

### (3) ②様式第3号-2 (報告書)

※文字のフォント、大きさは Meiryo UI /12 ポイント以上とし、行間・文字間、上下左右の余白は変更しないこと。

※写真は、進行プログラムに沿って適宜、右ページに簡単な説明文を添えて貼り付けること。

※必ず A3 片面 1 枚におさまるように作成してください。ファイルサイズは 5 MB 以下とすること。

NITS・教職大学院・教 育委員会等 コラボ研修プログラム 支援事業報告書	実施機関名・連携機関名 ※実施機関名、及び連携機関名（ある場合のみ）を記載すること。 茨城大学教職大学院、神栖市校長会、鹿嶋市校長会 事業名：【NITS・茨城大学教職大学院コラボ研修】 地域スクールリーダー育成セミナー ～校長会との連携による次期管理職候補者育成研修～ 開催日時：令和 7 年 8 月 22 日（金）9 時～12 時 開催場所：神栖市教育センター（茨城県神栖市矢田部 3 0 2 4） 参加人数（総数）と参加者の属性：公立小中学校教諭 25 名、教頭 32 名、校長 13 人（総数：70 名）
--	---

#### 目的：

本コラボ研修は、学校管理職及び次期管理職候補の教職員に対して、学校マネジメントに関する講義・演習を実施することを通じて、これからのスクールリーダーに求められる資質能力の育成に寄与することを目的とした。

NITS との連携協力協定締結（平成 30 年 3 月）以来、茨城大学教職大学院は茨城県内の現職教員の研修の高度化・体系化のために、地域ネットワークを生かした出前研修を行ってきた。令和 3～6 年度には、NITS・教職大学院コラボ研修事業の支援を受け、地域に根差した団体との連携による研修を実施し、各地域の課題に即した研修を展開することの重要性を認識するとともに、社会貢献に務めてきた。

具体的には、神栖市・鹿嶋市校長会と連携し、両市内小中学校の教頭ならびにミドル層の教諭を対象としたセミナーを行った。また、市校長会の幹部委員をはじめ、神栖市・鹿嶋市内の小中学校校長にも参加してもらった。市校長会は、各校長が日常的につながる機会が多い、身近な存在である。市校長会を通じて、各校へ募集をかけ、校長から推薦する形で受講者を募集したため、次期管理職候補の教職員が本研修へ積極的に参加することができた。

#### 内容：※全体発表の内容をテープ起こしするなど、具体的に記載すること。

今年度は、昨年度までの実績を踏まえ、市校長会の要望を受け、喫緊の学校マネジメントに関する講義・演習を行った。同市内および隣接市の管理職等（教頭、主幹教諭、中堅教諭等）がマネジメントに関する講義を踏まえ、現任校に根差したディスカッションを行うことで、より実践的な研修を計画した。講義・演習は、加藤崇英教授、高野貴大講師、鈴木稔特任教授（いずれも茨城大学教職大学院学校運営コース）が担当した。具体的には、講義 A「人財育成と学校力の向上」（高野・鈴木）、講義 B「学校のコンプライアンスの向上」（加藤）の 2 つの講義を設け、各 60 分で行った。受講者は、教諭班と教頭班の 2 班に分かれ、前後半で入れ替えを行うことで、同職位で講義 A・B の両方が受講できるようにした。

講義 A（写真 1）では、「令和の日本型学校教育」を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的方策について」（令和 4 年中教審答申）を踏まえ、学校組織全体で教職員の資質能力向上を行う上でのポイントについて解説するとともに、各校での取組と今後の方針について演習を行った。

講義 B（写真 2）では、危機管理意識の向上と風通しの良い職場づくりに向けて、教職員の不祥事に対する政策動向や統計データが解説された上で、ミドルリーダーや教頭が各校で取り組むべき留意点や対策について、議論が展開された。

講義に際し、テキストブック（写真 3）を本事業予算で作成し、裏表紙に本研修が「令和 7 年度 NITS・茨城大学教職大学院等コラボ研修プログラム支援事業」の助成を受け実施されたものであることを明記した。

#### 成果：※参加者の声など客観的な情報・データとともに記載すること。

研修終了後、受講アンケートを実施し、教諭 25 名、教頭 32 名、計 57 名から回答を得た。その結果、セミナー全体の満足度は肯定的解答がほぼ 100%（「満足している」：73.7%、「まあ満足している」：22.8%、無回答：3.5%）であった。「実践に活かすことのできる内容でしたか。」という質問に対しても、肯定的評価を得た（「そう思う」：75.4%、「どちらかと言えばそう思う」：21.1%、無回答：3.5%）。また、自由記述として、「どちらの講義も今一番必要な情報でした。学校の中でコンプライアンスや学校力の向上をどうしていけばいいのか学ばせていただいたので、学校の中で生かしていきたいと思えます。」や「本校で行っていることを再確認することができました。また、校内研究の本質を確認できました。」といった回答があった。ミドルリーダーや教頭といった学校経営を担う立場の教員にとって、学校改善に資する研修として本研修の意義があったと捉えられる。

## 「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付き

「NITS からの提案（第一次）」との関連における研修担当者としての気付きに以下 2 点がある。

第一に、「共通言語③ 豊かな気づきが醸成される学び」に関連し、校長会との継続的な連携を通じて、NITS・教職大学院等とのコラボレーション研修を一層深化できたことである。今年度のセミナーには、昨年度も受講した管理職等が一定数含まれており、アンケートの自由記述では、継続的な学校経営研修の意義を認める回答が見られた。また、「大学の先生から講義を受ける機会が少なく、貴重な経験でした。」との要望も寄せられた。これらの結果から、大学に所属する研修担当者として、受講者と研修担当者側が継続的に学校経営に関する学びを積み重ねることの重要性を再認識した。そして、大学が社会連携として提供できる「知」について、重要な役割を担っていると認識した。

第二に、「共通言語④ 研修デザインの三角形」に関連し、受講者の「気づきや変化」を重視した研修への転換を図ったことである。従来から、教職大学院の研究者教員と実務家教員によるチームティーチングを基盤に、講義の後に演習を行う形式を設けていた。今年度は、講義内で演習を適宜交え、理論や政策背景を講義しながら、喫緊の課題に関する演習を実施することで、同市および隣接市から集まった管理職等が地域事情に応じたマネジメントを議論できるようにした。アンケートの自由記述では、「身近な案件を自分事として考えられた」「職員会議で伝達したい」といった回答が多く、講義で得た知見を実践課題に結びつける姿勢が確認された。これらを踏まえ、研修担当者として、受講者の「気づきや変化」を促すためには、講義および演習テーマの双方において、連携先のニーズを反映したうえで、理論と実践の行き来を受講者に提供することが不可欠であると認識した。

**アイデアや工夫したこと：** ※実際の様子により分かるよう、必要に応じて写真や図を用いて説明すること。

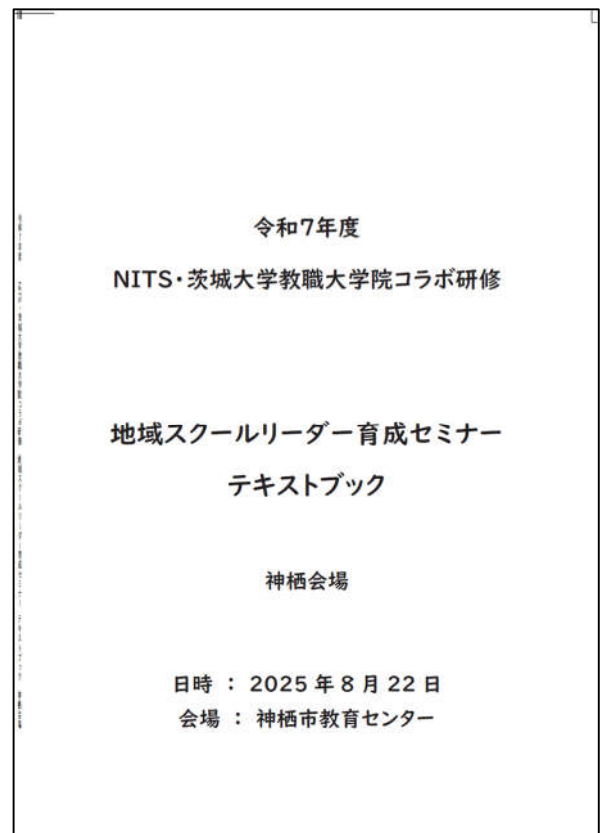
- ・市の校長会の意向を勘案して、講義テーマを設定し、地域における喫緊の課題に応えたこと（写真 1、2）
- ・昨年度までの連携の実績を踏まえ、今年度は職位別の講義の時間に演習を設定したこと（写真 1、2）
- ・演習テーマに沿ったテキストブックを作成し、講義・演習での理解を手助けするツールを配布したこと（写真 3）



↑ **写真 1** 講義 A の様子



↑ **写真 2** 講義 B の様子



↑ **写真 3** テキストブック